

ジェンダーに対する違和感尺度作成の試み —自己・他者の観点から—

関口美優香（龍谷大学大学院）

キーワード：トランスジェンダー，ジェンダー・ステレオタイプ，違和感

目的

昨今、LGBT という言葉の認知が高まってきている。トランスジェンダーにおける中心概念が“ジェンダーに対する違和感”であると考え、それがどのような次元で構成されているのかを調べるため“ジェンダーに対する違和感尺度”の作成を試みる。

方 法

調査協力者

調査協力者は、私立大学の学生 374 名、うち分析対象者は 362 名で、性自認・身体的性別を女性と選択した者（以下“女性”と表記）144 名（平均 20.08 歳；年齢幅 18～23 歳）、性自認・身体的性別を男性と選択した者（以下“男性”と表記）218 名（平均 20.14 歳；年齢幅 18～23 歳）であった。トランスジェンダーの人々のデータは十分な数を回収できなかったため、分析に含めなかった。

調査の手続き

2017年1月、大学の講義時間中に質問紙を配布し、その場で回収した。調査は無記名で行われ、回答者には、学部・学年・年齢・性別のみを尋ねた。また、性別に関しては、佐々木・尾崎(2007)に基づいて、性自認を男性・女性・どちらでもないという欄と身体的性別を男性・女性・問かけら選択する欄を設けた。

項目の収集

Bem (1974) の邦訳版、東 (1990 ; 1991) の BSRI 日本版尺度・伊藤 (1978) の M-H-F scale・伊藤 (1997) の性差観尺度を参考にしたものとしてトランスジェンダーの人が出生時の性の役割を強制されることで不快に感じる事柄からジェンダーに対する違和感尺度を作成した。

調査の使用尺度

使用尺度は、自分自身の行動や態度に対して違和感を感じるかを尋ねた「自己」の項目（48 項目）と他人について尋ねた「他者」の項目（46 項目）、全 94 項目で構成されている。評定は、「全く感じない」「少し感じる」「ある程度感じる」「強く感じる」「とても強く感じる」の 5 件法であった。

結果と考察

性別を独立変数にした多変量分散分析を行ったところ、有意な性差が見られたため (Pillai's trace ; $V=.891$, Wilks' lambda ; $\Lambda=.109$, Hotelling's trace ; $U=8.201$, Roy's largest root ; $\Theta=8.201$, すべて $p>.001$)、以後の分析においては、男性と女性別々に検討していく。

次に、探索的因子分析を行った。スクリープロットと平行分析の結果から、女性 7 因子・男性 6 因子を仮定して一般化最小二乗法、Promax 回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35を下回る項目については除外し、最終的に、女性 74 項目 7 因子 (Table1)・男性は 62 項目 6 因子 (Table2)を抽出した。

女性においては、第4・5・6・7の4因子は「自己」、第1・2・3の3因子は「他者」に関するものとなり、男性においては、第3・4・5・6の4因子は「自己」、第1・2・3の3因子は「他者」に関するものとなり、「自己」項目と「他者」項目が混ざってしまった部分もあるが、ほぼ分離できた。

今後は、因子間の構造をさらに検討していきたい。

Table 1 ジェンダーに対する違和感尺度 女性因子分析結果

[illegible]